

# 坂口安吾「文学のふるさと」 モラルの文脈

長 沼 光 彦

本論は、坂口安吾「文学のふるさと」で用いられた「モラル」という語の、同時代文脈を明らかにするものである。

## 1

坂口安吾「文学のふるさと」(『現代文学』一九四一(昭和一六)・七)では、「モラル」という語を主題として、文学の話が進められる<sup>(1)</sup>。はじめに「小説家の立場としても、なにか、モラル、さういふもの、意図がなくて、小説を書きつづける——さういふことが有り得ようとは、ちよつと、想像ができません」と、小説とモラルの結びつきが必然だと位置づけたうえで、シャルル・ペローの童話「赤頭巾」の例をあげ、「全然モラルのない作品が存在する」と述べる。

私達はいきなりそこで突き放されて、何か約束が違つたやうな感じで戸惑ひしながら、然し、思はず目を打たれて、プツンとちよん切られた空しい余白に、非常に静かな、しかも透명한、ひとつの切ない「ふ



奥野健男は「文学のふるさと」の中に、「一切の救いを拒絶した先にある、虚無の中にこそ文学の原点を見出していた安吾の厳しさ」があると、坂口安吾の「孤独の涯の極限の精神」を見出している<sup>(3)</sup>。「モラルがない」「突き放す」という表現に注目して、自身が坂口安吾文学の特徴と位置づける「虚無的合理主義」の現れと見なすのである。

一方、中畑邦夫は、「モラル」という語の多義性に注目したうえで、「ニヒリズムを退けるための「救い」が見出された時、「ふるさと」はまさに「ふるさと」としての、狭義の文学の、また人間が世界に意味の体系を構築してゆくという営みという意味での文学の「起源」としての「ふるさと」になる」として、「倫理を構築しようとする安吾の意志」を見出す<sup>(4)</sup>。「モラルがないことがモラル」という逆接的表現には、モラルを喪失した虚無にとどまらず、モラルの再構築という坂口安吾の態度が含まれているというのだ。

中畑邦夫の読解によれば、「モラル」という語に注目すると、少なくとも二つの意味を見出せるということになる。喪失した既存の道徳と、その道徳を乗り越える倫理の二者だ。本論では、この読解をふまえ、「文学のふるさと」発表当時の社会的文脈において、それら対立する二つの意味を「モラル」という語が含意していたのか、検討するところから始めた。

## 2

林淑美は、「文学のふるさと」のモラル論について、近い時期の戸坂潤「道徳の観念」(『道徳論』三笠書房、一九三六〔昭和一一〕・五)<sup>(5)</sup>を参照すると、その意義が明らかになるといえる<sup>(6)</sup>。林淑美は、「モラルがない」ということ自体が「モラルなのだ」という一節の「二つのモラル」を、「前者は文学が反逆すべきモラル」であり、

「後者は文学が扱って立ち、また文学が追究すべきモラル」だとする。この対立の仕方が、「道德の観念」における、「通俗的道德を批判する」文学という位置づけに近いというのである。

林淑美は、「道德の観念」第四章「道德に関する文学的観念」中の、「文学（広く芸術に於ける精神）がモラル（この文学的道德の観念）を追求するものだ」という事実は、文学が常に常識に對する反逆を企てるものだということに、一等よく見て取れるだろう」、あるいは、「道德の否定そのものが、又優れた道德だ」といった一節をふまえ、戸坂潤が文学を、常識に反逆して新しい道德の概念を探究するものと見なすとする。その文学観により、既存の道德を解体して新たな道德を創出する、坂口安吾の主張が理解できるというのだ。

林淑美の指摘により、「文学のふるさと」と近い時期に、文学のモラルが常識的な道德を乗り越えたとする議論のあることが明らかにされた。また、共に文学的道德を「モラル」という語で表す点は、共通の文脈を持つ証とも思われる。ただし、「道德の観念」は、「文学的道德の観念」をあえて「モラル」と呼び、「通俗常識的観念」あるいは、道德の概念一般を「道德」と呼び区別する。「モラルがない、ということ自体が、モラル」という「文学のふるさと」の、同語を反復する表現とは異なるのだ。「道德の観念」の「モラル」は、当時の文学領域における流行語を使って、文学的道德を対象化するための用語である。

「道德の観念」は、『唯物論叢書』の一冊として出版された『道德論』に掲載した論文であり、道德を「史的唯物論によるイデオロギー理論乃至文化理論」によって、「社会構造の領域乃至文化領域の一つ」として位置づけるにとどまらず、「常識的な道德という観念によって指し示された領域が果してそのままに理論的に不都合のないものかどうか」考察することを目的とする（第一章「道德に関する通俗常識的観念」）<sup>7</sup>。

その論旨において、まず既存の倫理学が、史的唯物論をはじめとした社会科学の観点から批判される（第二章「道德に関する倫理的観念」）。倫理学は、ブルジョア社会のイデオロギーをそのままに反映して、道德

を「不変不動な超越的な一つの永久世界」と見なすため、「科学的でなかった」ものとして、「終焉」すべき「道徳」と結論づけられる（「第三章 道徳に関する社会科学的観念」）。自身が拠って立つイデオロギー構造を分析することができない倫理学は、史的唯物論に照らせば、科学的ではないものと批判されるのだ。

一方、文学の道徳的観念は、倫理学とは異なる可能性を持つ。文学や芸術は、歴史叙述や衣裳と同様に、「所謂道徳という領域には普通属していないもの」と見なされるが、イデオロギー論の観点からすれば、むしろ「道徳の実質がある」といえる。それらは「文化的な自由」あるいは「モラル又は倫理」と呼ばれ、「モラルという言葉が今日では全く文学的な用語として通用している」という。文学の道徳は、倫理学のように道徳の領域に含まれると見なされないが、文学領域の中では「モラル」という語で認知される。

さらに文学は、社会科学のような分析により通俗道徳を解体せずに、あらたに道徳そのものを示すという。「道徳の文学的観念は、道徳を道徳として、モラルとして、云わば止揚し且高揚する処の観念に他ならない。」通俗道徳に対して異なる道徳を示し、両者の対立から発展への過程で新たな道徳として、文学のモラルを生み出すというのである。先に林淑美が、新しい道徳概念の創出として位置づけるのは、この戸坂潤の考察である。

ただし、「文学的道徳の観念を吾々は無条件に信用してかかつてはならない」と議論は続く。「モラルという文学的観念を、どうやったならば科学的な道徳（モラル）観念にまで、洗練出来るか」という考察が必要だという。なぜなら「多くの文学的モラルは、社会科学的認識と関係なしに、何か自分だけで纏まり得たようなモラルとなっている」からだ。「文学的表象が持つ象徴や空想や誇張その他の、この非存在的な機能」が、道徳を自己にのみ関わるものと見なし、社会科学が重んじる、個人や道徳の社会的存在としての側面を見失わせる。そのため文学のモラルには、社会科学的認識が必要だと強調するのだ<sup>⑧</sup>。

「道徳の観念」の道徳論は、文学のモラルが、「常識に対する反逆を企てるもの」にとどまらず、史的唯物論

と同等に、社会的存在としての道德という認識に至ることを求める<sup>(9)</sup>。一方「文学のふるさと」においてモラルの喪失と獲得は、「絶対の孤独」という個人的な経験として語られている。むしろ「文学のふるさと」は、戸坂潤が対象化した「自分だけで纏まり得たようなモラル」という文学の振る舞い一般の中に含まれるだろう。ここで本論は、戸坂潤の、モラルが「今日では全く文学的な用語として通用している」という発言に注目したい。「道德の観念」と同時期に、文学領域で「モラル」という語は、どのような社会的文脈で登場したのだろうか。

## 3

戸坂潤「文学・モラル及び風俗」(『思想と風俗』三笠書房、一九三六・一二)<sup>(10)</sup>は、「モラルなるものは何と云っても最近の文壇の大きな問題である。それは流行つてゐる」として、「ブルジョア文学(プロレタリアの文学に就いては勿論だ)のこの評論的触手——文学の思想性とか社会性とか論理とか——を或る意味で用意したものは、正に曾ての「プロレタリア文学」とその或る意味での転向又転向化とであつた。プロレタリア文学の転向(?)によつて却てブルジョア文学も亦初めて自分側の思想性・社会性・論理性を誘発された。之が所謂「モラル」の声である」とする。

同様の時代認識を示すのが、宮本百合子「今日の文学の展望」(一九三七(昭和一二)生前未発表)である<sup>(11)</sup>。一九三一(昭和六)年秋の満州事変以降、プロレタリア文学は退潮し、一九三三(昭和八)年末には、「運動としてまとまった形態での活動力を喪つた」とする。一九三二(昭和七)年に、林房雄が出獄し、「旧プロレタリア作家を吸いあつめ、文芸復興の叫びをあげ」て、「現実の認識、芸術評価の問題等を蹴ちら」すと、転

向文学と通称された作品が登場して、「社会性を抹殺した文学熱、簡人化された才能の競争で一般的人間を描かんとする熱を高めた」という。文学に対する熱意を認めても、プロレタリア文学の立場から、「社会性」が欠如することを批判するのだ。

「今日の文学の展望」のこの箇所で、「モラル」という語は用いられないものの<sup>(12)</sup>、プロレタリア文学からの転向が、社会性を喪った人間一般に対する興味を文学の領域にもたらした情勢が示される。続いて、モラルという語の使用、また社会性への興味の事例として上げられるのが、一九三四（昭和九）年後半に、提唱された「行動主義文学」である。

「主として新フランス評論（N・R・F誌）による人々ラモン・フェルナンデス、アンドレ・マルロオ等によって唱えられていた「行動のヒューマニズム」において、「行動は人間の社会性を意味し、ヒューマニズムは個人の完成を意味する」という。「今日の文学の展望」には、紹介者の一人小松清の「行動主義文学理論」（『能動精神パンフレット』紀伊國屋出版部、一九三五（昭和一〇）・六）中の一節が引用されている<sup>(13)</sup>。「(C)ヒューマニズムのモラルの上に立つ行動主義は、必然、個人主義である。しかしこの個人主義はエゴ中心的な（満足した自我）のブルジョワ個人主義ではない。この個人主義は（自我の発展）の希願の上に立ち、（モニュメンタルな我）（コスミックな我）」としての自我意識をもつものである。」行動主義は、行動という社会性によって、ヒューマニズムのモラルに基づく個人を完成させるというのである。

戸坂潤は「行動主義文学について」（『思想としての文学』三笠書房、一九三六・二）<sup>(14)</sup>で、行動主義が「マルクス主義の退潮」によって現れ、「非マルクス主義乃至は反マルクス主義的でさえあった」文学者が「自由な意志乃至意欲とを取り戻し得るような意識」を自覚し始めた動きとして、インテリゲンチヤの問題をそこに見出している。行動主義は、「文学・モラル及び風俗」で言う転向以後の「文学の思想性とか社会性とか論理」

の一つである。

また戸坂潤「モダニズム文学について」(『思想としての文学』同前)<sup>15</sup>は、「純文芸(當時はまだその頃そういう言葉は流行らなかつたと思うが)又は新興芸術の名によって、反動的又は逃避を企てたものが、この感覺主義的モダニズム」だとして、「単なる感覺主義にはモラルがない」とする。「道德の觀念」と同様に、「自分だけで纏まり得たようなモラル」である文学を批判するのだ。一方「新先知主義・新理知主義・新社会派等々にまで分化発達した」モダニズムは、「例の意識の流れの文学になればすでにモラルがないとは云えなくなる」。そこには「パーソナリティ」と言えるものがあるからだという。これをふまえれば、戸坂潤のいう文学のモラルと関わるものは、広義のモダニズム文学全体ということになるが、まずは一九三四年の行動主義のモラルに注目したい。

## 4

「今日の文学の展望」は行動主義文学について、「行動のヒューマニズム」が、超階級の箇人主義的であること、左右両翼に対して本質では知性の独立を期すために、「プロレタリア文学の蓄積と方向とを否定しつつよくそれと対立しつつ、悪化する情勢には受動的で、社会矛盾の現実には知識人間にも益々具体的な階級分化を生じつつあるという社会・文化発展要因を抹殺した」と批判する。階級社会の現実を看過したとの見解だが、小松清は先の「行動主義文学理論」引用で、「ブルジョワ個人主義ではない」と述べるように、プロレタリア文学理論を批判的に継承しながら、行動による個人と社会の接続を目指した。

小松清「行動主義文学の提唱」(『行動主義文学論』紀伊國屋出版部、一九三五〔昭和一〇〕・六)は、「総括



的に云つて今日、日本文学を二分してゐるものは自然主義とプロレタリア文学である」としたうえで、両者は一九世紀的な「文学的思惟及び表現方法において軌を同じくする」ものだとする<sup>(16)</sup>。一方、「近代生活を唯一の文学的対象」とする「吾々」は、二〇世紀に登場した表現派、立体派に倣つて、「新文学も新しい環境に応じた表現を発見しなければならない」という。その姿勢を「文学の革命」として、「吾々がプロレタリア文学をモダニズムによつて更新する努力であるとも、また逆にモダニズムをプロレタリア意識によつてより時代的なものにならざるものであるとも云へる」とする。

「文学の革命」を目指さない文学は、旧態の觀念に基づき、過去の文学のモラルを再生産する。「吾々を圍繞し窒息せしむる心境小説、私小説または觀念分析の主權デイクタの下にあるモラル小説の充満と、それらを一貫する地方主義的な反近代的雰囲気は、(文学の革命)を忘れた今日の文学者が必然に過去文学の内容と形式を墨守し、遂には過去文学の(追憶の文学)しか所産し得ないところからくるのである」とする。プロレタリア文学を批判するのは、その社会意識ではなく、「文学精神の旧套」に対してだといふのである。

これに対し行動主義は、「意識生活の拡大と深化を要求する」といふ。「意識生活の發展は現實的行為によつて保証されると共に、行為の持つ意思性によつて一定の力線上に統一され自発的な活動を営むことが出来、更に行為を反射的に作用するもの」だ。従来の文学は「理論的な觀察」にとどまるが、行動主義は、意識と行為の相互作用を目指すことで、「意識の行動状態の内部に浸透」した「実験に出發する小説」となり得る。つまり、行動を媒介することで、固定化した思想を解体し、行動との相互作用で變化する内面的活動を捉えようとするのである。「実験」は思想の意義を行動において確かめるといふことだ。

さらに、「行動主義の諸問題」(『行動主義文学論』同前)では、「行動の事実」「実験」によつて、「従来の思想、芸術にあつて一方的に分離され勝ちであつた「外部」と「内部」が相互的に最も密接な結合交流の上に置かれ

てくる」とする。従来の思想で対立するものとされてきた、「自我」としての内界と「世界」としての外界は、行動主義の中で相互に作用するものと位置づけられ、近代における「人間的価値の再創」となるという。これを「行動主義文学理論」では、行動主義におけるヒューマニズムのモラルというのである。

ここで小松清は、社会制度による支配という観点を欠くものの、戸坂潤のイデオロギー論と似た思想批判を述べている。自然主義のように素朴な写真と見える文学の背景にも、観念やモラルが隠されているというのだ。そのため、「在来のレヤリズム、自然主義、プロレタリア文学」を「あらゆる主智主義による文学」と位置づけ、行動主義の意識と行為の「相互作用」により、観念やモラルを更新することを目指す。また、「相互作用」は、プロレタリア文学の観念により固定化された社会ではなく、行動という意識の実験により、個人と新たな関係を結ぶ社会を見出そうとするのである。

小松清の行動主義とその評価を並べて見ると、一九三四年以降、モラルを有することの意味や、モラルの背景にある思想が問われてきたことがわかる。モラルは同時代において一律のものではなく、依拠する思想によりモラルの中味も、モラルと人間および社会との関係も異なるものと見なされる。戸坂潤によれば、この思考自体がプロレタリア文学からもたらされたことになるが、文学領域の一定の範囲で共有されていたのは確かだ。ここで「文学のふるさと」以前に、「モラル」に言及した坂口安吾の文章を見てみよう。坂口安吾「花」の「確立」(『読売新聞』一九三八(昭和一三)・一一・一五)は<sup>(17)</sup>、「文学も勿論さうだが、生活も、元来が平時のものである。戦争は特殊な過渡期で、いはゆる非常時だから、戦場に文学はないし、また生活もないと思ふ。」という一節から始まる。一九三七年に勃発した日中戦争を背景とした文章である。

芸術は生の分裂をさらしては成立たない。当今知性文学とよばれるものの芸術上の失敗もここにあり、

モラル探究の情熱が却つて文学を殺す結果を生んだ。即ち作家の人生発育の分裂が、芸術自体と混同され、芸術そのものに分裂や、生の裸像をさらしたことの間違いであった。知性やモラル探究が間違つてゐたのではない。また、作家自体の分裂は、芸術の最も重大な温床である。

知性によるモラルの探究は、生を露出させ、芸術を分裂させた。知性文学は、探究の過程を描くことを芸術だと勘違いしたというのだ。ここでいう知性の探究は「戦前の日本」のものだとされており、戸坂潤のいう転向後のモダニズム文学の活動を指すと思われる。その過ちが生まれたのは、芸術を育てるはずの「生活程度が低かつた」からだという。

日本人は最も素質ある国民で、観念生活は豊富であるにも拘らず、生活程度がそれにとまはないために、生活感情が混乱せざるを得なかつた。生活に浪漫的情熱の正当な温床がなかつたから、従而、感情のともなはぬ知性も発育するに由なく、徒らに混乱して、芸術の姿を失ふばかりであつた。

思想など観念は豊富でも、裏づける生活がなければ、芸術の本体が見失われるというのである。坂口安吾は、作家の分裂を文学を生み出す源と認めるものの、分裂自体を描く文学を認めない。なぜなら「新しい文学に必要なのは、芸術としての完成である。生活の「花」としての確立である」と考えるからだ。芸術は、観念と生活が一体となった完成物である。

「花」の確立」は、文学の観念的な探究を批判する点で、小松清に近い立場にあるように見える。一方で、文学の完成を目指し、その根柢に生活という実態と浪漫的精神を置く点では、むしろ小松清に批判された、旧

態の文学思想に近いものとも思われる。また、モラルの知的探究を失敗と位置づける点で、戸坂潤のいうモダニズム文学にも入らない。「花」の確立」を見るかぎり、坂口安吾は、モラルの流行とは距離を置いている。

この坂口安吾のモラルに対する態度を検討するために、「文学のふるさと」で語られるモラルと創作の關係に注目してみよう。「文学のふるさと」では、モラルがない出来事に遭う作家として、芥川龍之介が取り上げられる。モラルのない状況を受け止める心情について、文学を創作する作家の立場から語る内容だ。

## 5

芥川龍之介の話の前には、「赤頭巾」に続く二つ目の物語「狂言」があげられ、モラルのない物語に読み手が「突き放され」る事態が示される。読み手は「モラルに相応する笑ひの意味の設定」がないために、「平凡だの当然だのといふものを超躍した驚くべき厳しさで襲ひか、つてくることに、いはゞ觀念の眼を閉じるやうな気持ちになる」という。「突き放す」とは、理解の手がかりがない状況を言うのである。理解できないまま受け入れざるを得ないため、読み手は「モラルがない、といふこと自体が、モラルなのだ」と考えるしかない。ここで、先のモラルは「平凡だの当然だのいふもの」であり、次のモラルは「觀念の眼を閉じるやうな気持ち」で受容するものということになる。続く芥川の話は、作品にモラルを与えるはずの作家が、「狂言」の読み手と同様に「突き放された」事態を示す。

芥川は訪れた農民作家から、貧しい農民が生まれた子ども殺して埋める話を書いた原稿を渡される。芥川の「現実の生活から割り出してみようのない話」であるため、本当の話かと尋ねたところ、農民作家は自分のしたことだと答えたため、芥川は呆然とする。だが、その芥川の経験は、作家に必要な契機とされる。「何事に

まれ言葉が用意されてゐるやうな多才な彼が、返事ができなかつたといふこと、それは晩年の彼が始めて誠実な生き方と文学との歩調を合わせたことを物語るやうに思はれます。「モラルがなく表現しえない出来事に出席うことにより、むしろ、文学と生活の調和が成立したというのだ。

「文学のふるさと」は、農民作家の話と芥川の経験と共に、「根の下りた生活」という語で表す。農民作家の話は、「芥川の想像もできないやうな、事実」であるという点においてだ。一方の芥川は、農民作家の事実を自己のモラルの中に持たないため、その生活の「根がおりてゐない」と言える。にもかかわらず、「根の下りた生活に突き放された事実自体は立派に根の下りた生活であります」とするのである。作家は、自ら経験しなくとも、モラルがない事態に出遭い、これを受け入れることで、「モラルがない、といふこと自体が、モラルなのだ」と覚悟する「根の下りた生活」に至るといふのだ。

これを「花」の確立に当てはめてみれば、芸術に分裂をもたらす生活と観念の乖離が、「突き放され」ることで、「根の下りた生活」に転ずるといふことだ。モラルの追究という、自己の観念の中にとどまった営みは、生活という土台を見失っている。むしろ、自己の観念の限界、「想像もできないやうな、事実」に行き当たることで、「根の下りた生活」の实质をつかむのである。「文学のふるさと」でモラルは、知的営みにより探究されるものではなく、必然的に、否応もなく出遭うものとされるのだ。

この芥川の話は「文学のふるさと」以前に、「女占師の前にて」(『文学界』一九三八・一)、「吹雪物語」(竹村書房一九三八・七)で引用されていた<sup>18)</sup>。「女占師の前にて」では自身の言葉として、「吹雪物語」では登場人物の芥川評の言葉として登場する。ただし、「文学のふるさと」とは異なり、モラルの話ではなく、芥川の知性の限界の話として語られている。

「女占師の前にて」では、芥川と農民作家の話を示した後、「芥川龍之介の自殺は日本に於て(世界に於て

でも同じことです）稀れな悲劇的な内容をもつた自殺だ思ふ」とする。芥川の文学は「博識にたよりがち」であつたが、博識は「十年も読書に耽ければ一通りは身につく」ものだ。一方、「自らの祖国と血と伝統に立脚した誠実無類な生活と内省がなくて教養は育たぬもの」である。芥川は晩年に至り、「自分に伝統がないこと、なによりも誠実な生活がなかつたことに気付かずにおられなかつた」とする。その芥川は「一農民の平凡な生活に接してもそこに誠実があるばかりに、彼はひとりとり残された孤独の歎きを異常な深さに感じなければならなかつた」という。農民には誠実があつたが、芥川にはなかつたと対比するのだ。そのうえで、「彼の生活に血と誠実は欠けてゐても、彼の敗北の中にのみは知性の極地のものをかり立てた血もあり誠実さもありました。」とする。芥川の敗北の中に、むしろ誠実があるというのだ。

ここでは農民の誠実な生活に知性が敗北したと、知性と生活が対比されている。これをふまえ、敗北の中に誠実があるとする展開は、「文学のふるさと」の、「根の下りた生活に突き放されたといふ事実自体は立派に根の下りた生活であります」という主張と呼応する。ただし、「文学のふるさと」の芥川は、モラルがないふるさとを見出すだけだが、「女占師の前にて」の芥川には、「祖国と血と伝統」という本来戻るべき場所が示されている。拠つて立つ伝統を持たないがゆえに、芥川は「敗北」したとされるのである。

この「敗北」という語は、宮本顕治「敗北の文学」（『改造』一九二九〔昭和四〕・八）を想起させる<sup>19</sup>。「敗北」は芥川「或る阿呆の一生」（一九二七〔昭和二〕遺稿）「五十一 敗北」の章題から取つた言葉だが、宮本賢治は、一九二五〔大正一四〕年の日本プロレタリア文芸連盟の結成の年、「日本プロレタリアートの全線的展開の時代」に動揺し、「階級的地盤を持たない」孤独な小ブルジョア・インテリゲンツの「自己解体」を表す言葉として用いた。自分の立場を再構築できない中間層である知識人の限界を指摘するのだ。

「敗北の文学」では、「階級的な地盤」を持たないことを、芥川の知性の敗北と位置づけるが、「女占師の前にて」

は、過去から続く伝統的な生活がないことを、知性の限界とする。根拠とするものは異なるが、知性が何らかの思想的基盤を持つべきだとする点では、同型の思考と言えよう。「敗北の文学」をふまえながらも、階級闘争を社会的現実とするプロレタリア文学の思想を受け入れず、伝統の断絶という日本近代の歴史的問題として捉え直すのである。そのうえで、知性の「敗北」と見えるものを、自己の欠如を自覚する姿勢として、「知性の極地」に読み替えるところに、作家としての芥川を救う意図が覗えよう。

「女占師の前にて」では伝統が、「花」の思想」では生活そのものが、芸術の基盤とされていた。一方「文学のふるさと」では、モラルが絶対的な価値だと見なされず、拠って立つべき場所は示されない。「根の下りた生活に突き放されたといふ事実自体は立派に根の下りた生活であります」という表現は、「モラルがない、といふこと自体が、モラルなのだ」と同様に、存在しないことを存在とする矛盾した表現である。「突き放された」ことで見出される「ふるさと」もまた、「大人の仕事は、決してふるさとへ帰ることではない」とされ、本来居るべき場所ではないことが示される。

モラルの喪失に注目すれば、「文学のふるさと」では、本論の始めに読解の手がかりとしたモラルの構築は明示的に語られておらず、むしろ奥野健男の言うような「虚無」が人間生活の原理とされていると言えよう。このような「モラルがない」という考え方は、同時期の道徳論の中で、どのように扱われていただろうか。

## 6

「文学のふるさと」では、「赤頭巾」が「アモラルということ、仏蘭西では甚だ有名な童話」であるとされる。「モラルがない」ことを、「アモラル」という語で表すのだ。ただし、作者のシャルル・ペローは、むしろ

「教訓、モラル」を重んじる立場を表明した作家、思想家だった。

日本においてペローは、大正期の児童文学の盛んな創作活動や海外文学の紹介に伴い、その創作した物語（コント）が童話として翻訳されるようになる。「赤頭巾」が収録されたものでは、楠山正雄訳『世界童話名作集 第一篇』（家庭読物刊行会、一九二〇〔大正九〕・九）、佐々木孝丸訳『世界童話大系第九卷』（一九二六〔昭和元〕・一二）などがある<sup>20</sup>。

一方、太宰施門『仏蘭西文学史』（玄黄社、一九一七〔大正六〕・二）など文学史を扱った書物では、一七世紀後半フランスで起きた新旧論争の発端となった人物として紹介される。新旧論争は、ギリシア・ローマ文化を築いた古代人と、一七世紀から一八世紀の近代人のいずれが優れているか論じたものである。論争の端緒となったペローの詩「ルイ大王の世紀」（一六八七）は、当代の「ルイ大王の世紀」は、ローマ時代の「アウグストゥスの世紀」に比肩すべきものだと言った。ヨーロッパ文化の基礎となるギリシア・ローマを理想とする古代派に対し、フランス近代国家の価値を示そうとするものだった<sup>21</sup>。

ペローは「韻文による物語」（二六九五）の「序」で、「教訓という面から見れば、大抵の古代の寓話、とりわけ「エペソスの寡婦」や「プシケ」よりも、私の物語のほうが語られる価値があるとさえ、言いたいのです。教訓こそあらゆる寓話の根本をなすものであり、寓話はそのために作られたはずのものです。」と述べる<sup>22</sup>。ペローは、古代の寓話の教訓は理解しがたい点があるが、自分が選んだ「先祖」の物語は、「徳が報われ、悪が罰せられる」という「有益な教訓」が含まれるというのだ。この「序」は、「文学のふるさと」発表以前に、長松栄一訳『仏蘭西家庭童話集』（改造社、一九三二〔昭和七〕・一）で要約して紹介されている。

「序」で「教訓」と訳される語が、原文のモラル (morale) である。ペローは明確に、読者にとって有益なものとして、モラル、教訓を推奨していた。また「赤頭巾」を含むコント集の題名は、『過ぎし昔の物語なら



びに教訓』[Histoire ou contes du temps passé, avec des moralités] (一六九七)であり、それぞれの物語の末尾には教訓が付されている。坂口安吾は、「ペローとモラルの関係にあえて眼をつぶり、「赤頭巾」を「アモラル」な物語としたことになる。

この「アモラル」という語は、「文学のふるさと」と近い時期に、倉田百三「教養と倫理学」(『学生と教養』日本評論社、一九三七・二二)の中で用いられている<sup>(23)</sup>。同文章が収められた『学生と教養』は、「序」で河合栄治郎が「青年殊に学生の気風が沈滞してゐることは、今日一般に云はれる所である。なるほど数年前マルキシズムの華かなりし当時に比べると、色々の点に於て異なるものが見えることは事実である」と述べるように、戸坂潤「文学・モラル及び風俗」の言う転向後の思想活動の一つだ。ただし、「自己に直面する客観的現象の解剖と分析とに急であつた」学生に、「いかなる客観の動揺に逢着するも、毅然として動かざる自我」の建設を進め、「客観から主観へ」と「視点の転化」を求める点で、社会的な興味とは逆向きの志向を提言するものだった。河合栄治郎は、「客観の分析」や「客観の変革」の前提を、「主観」の在り方だといふのである。倉田百三もこの主張と同様に、「何が真であるか偽はりであるかの意識、何が美しいか、醜いかの感覚」という主観の必要性を説く。その文脈で、「倫理的なるものに反抗し、否定するアンチモラルはまだいい。それは猶倫理的関心の領域に居るからだ。最も許し難いのは倫理的なものに関心をもたぬアモラルである。」と述べる。アンチモラルは、既存の道徳に反抗する倫理的態度だが、アモラルは、モラルへの関心そのものを欠くため、「人間としての素質」を欠く態度だといふのである。

この道徳的関心の区別は、カントの道徳論をふまえた新カント派の議論によるものと思われる。例えば、伏見文雄訳パウル・ヘンゼル『倫理学の主要問題』(理想社出版部、一九二九〔昭和四〕・一一)は「第六講 無道徳、反道徳、悪」で、「道徳的必然性を考へる事によつて障礙に打勝つと云ふ事なく起つた様な行為は凡て

道徳的と称せらる、事を要求する事は出来ない」として、「反道徳でもなければ、況んや、悪でもない」ゆえに、「非道徳的 (nichstitchig)、或は寧ろ、無道徳的 (ausserstitchig) と称さなければならぬ」とする。道徳を意識することない行為は、道徳に対立する反道徳ではなく、関心がない無道徳と言うべきだといふのである。道徳に対する意識の有無で、「反道徳」と「無道徳」を区別するのだ。哲学の領域では、「道徳」が用語として定着しており<sup>(24)</sup>、倉田百三の「モラル」「アンチモラル」「アモラル」は英語をそのまま用いたものと思われる。

パウエル・ヘンゼルの区別にしたがえば、意識された行為、思想的な発言は、無道徳(アモラル)と言えないことになる。同様の趣旨を述べるのが、西脇順三郎「モラルと文学」(『ヨーロッパ文学』第一書房、一九三三・五)である。「肉体的自然主義はモラルを考へないといふが、しかしありのままにみるこがよいこととすることも一つのモラルである。要するに文学上の価値観は結局モラルである」とする。人間の欲望に注目する自然主義は、無道徳のように見えるが、「ありのまま」という道徳を有するという。先の小松清「行動主義文学の提唱」が、自然主義を「主智主義による文学」と位置づける議論と同様の考え方だ。西脇順三郎は「知識を求めることそれ自身一つのモラルな作用である」とする。

これらをふまえると、一九三四年頃の文学領域では、あらゆる文学には観念の投影があるという思考が共有されており、その観念をモラルと呼ぶ場合があったことがわかる。「文学のふるさと」でいえば、「モラル、さういふもの、意図がなくて、小説を書きつづける」ことはできない、という冒頭の発言につながるだろう。「文学のふるさと」は、あらゆる文学はモラルを持つという同時期の言説をふまえながら、「モラルがない」状況を示すことで、その共通理解を覆すのである。

ここで「文学のふるさと」により近い時期の、道徳に関わる発言を見てみよう。『思想』一九三九(昭和一四)年四月号では、「道徳の問題」の特集が生まれ、「現代文学におけるモラルの問題」の題で、阿部六郎と

中野重治が寄稿している。他の文章は「道徳」を用いており、この時期でも、モラルという語を用いるのは、文学学領域の特徴のようだ。

阿部六郎は、「インモラリスト」であるボードレルやニイチエらの「芸術から道徳を追放することを念じた」行為は「モラル」に値するとして、西脇順三郎と同様の、反道徳は道徳だとする話から始める。文学においては、作家の苦患の裏にモラルの問題があるはずだが、現在の文学は、自然主義、社会主義、心理主義など近代の思想が重荷となり、モラルの飛躍が抑制されているとする。特に社会主義は、モラルの責任を「個体から制度へと移すもの」で、「モラルそのもの、生存の意味の根本的欲求を先に延ばすやうに人間を安心させる働きをもつ」としているとす。種々の思想がモラルを抑圧するという主張は、小松清に近く、社会主義を批判してモラルを人間の内面的欲求と捉え直す点は、河合榮治郎の「客観から主観へ」と方向づける思考と似ている。

一方、中野重治は「狭く限定して」と副題を付け、あくまで作家の経験を語るとする。古い社会の段階で道徳は、社会生活により生かされていたが、社会の新しい段階になると、社会生活との直接のつながりではなく、個人の頭の中で発達するものとなった。そこで文学も、「作品の取り扱ふモラーリッシュな問題または、特定のモラルが、作者によつて自己の問題として取り扱はれ」ることが求められるという。やはり、個人がモラルおよび文学の出発点と考えられる近代文学の特徴を指摘するのだ。

宮本百合子「今日の文学の展望」の批判にかかわらず、一九三五年頃の文学領域では、プロレタリア文学、社会主義の思想を、自意識の発達を妨げる障碍と見なし、モラルの出発点を社会から個人へと置き直す考え方が共有されていた。人間の内界の葛藤を外界に反映した観念や行為がモラルであり、人間の知的活動だと捉え直されたのである。「文学のふるさと」も、「生存それ自体が孕んでゐる絶対の孤独」を出発点とする点で、個人がモラルの基盤だとすることに変わりはない。

ただし、モラルの獲得ではなく、モラルの喪失から話を始めるところに、同時期の道徳論論とは異質な面がある。「根の下りた生活」という外界に出遭いながら、それ自体は、自分のモラルとして内面化しえないものだと思われる。同時期の言説が、内界から外界へと働きかける通路の存在を前提とするのに対し、「文学のふるさと」は、内界と外界の切断から、モラルが始まるというのである。

『思想』一九三九年四月号では、文学や倫理学以外の道徳論として、「民族と道徳」「道徳と制度」などが取り上げられる。日中戦争中の言説の中では、プロレタリア文学の示す階級社会という現実に代わり、民族や国家という外界が実態のあるものとして現れ、個人との関係が問われる情勢になっていた。文学領域でモラルの出発点とされる内界も、新たな外界と向き合うことを強いられる。

坂口安吾は「花」の確立で「戦場に文学はないし、また生活もないと思ふ」と述べていた。戦時には「女占師の前にて」で言う、文学が根拠とすべき「伝統に立脚した生活」も無いことになるだろう。坂口安吾の文脈でいえば、本来文学の生まれる場所である「文学のふるさと」は、伝統に基づく豊かな生活のはずだが、拠って立つべき生活がない戦時では、「モラルがない場所」とならざるを得ない。したがって、そこに何も無くとも、「突き放された」経験自体を、モラルとするしかない、ということになるのである。

## 註

(1) 「文学のふるさと」本文は、『坂口安吾全集03』（筑摩書房、一九九九年・三）による。

(2) 原卓史「坂口安吾「文学のふるさと」論」(『高知大國文』二〇一五・一二)は、「ふるさと」を「出発点でありながら、決して逃れられない場所」の二面性にまとめる。

- (3) 奥野健男『坂口安吾』（文藝春秋、一九七二・九↓新版文藝春秋、一九九六・二〇）。
- (4) 中畑邦夫「構築への意志―坂口安吾「文学のふるさと」における倫理の始まり―」（『麗澤大学紀要』二〇一〇・一一）。
- (5) 「道徳の観念」本文は、『戸坂潤全集第四卷』（勁草書房、一九六六・七）による。
- (6) 林淑美「坂口安吾と戸坂潤―「墮落論」と「道徳論」のあいだ」（『文学』岩波書店、二〇〇二・三↓『昭和イデオロギー思想としての文学』平凡社、二〇〇五・八）。
- (7) 林淑美は、坂口安吾「墮落論」（『新潮』一九四六〔昭和二二〕・四）中に、イデオロギー批判を見出すことができるため、戸坂潤と類縁性があるとみる（『坂口安吾と戸坂潤』同前）。
- (8) 太田信二「文学―科学―道徳―戸坂潤における「認識」をめぐる」（『國學院大學北海道短期大学部紀要』二〇一三・三）は、戸坂潤「思想としての文学」（『三笠書房、一九三六〔昭和一一〕・二〕「序」の「文学と道徳との関係、道徳というものの新しい意義、そして之等のもとと科学との連関などの分析に就いては、私は今後に向かって相当の希望を有っているのである」という発言などから、文学と道徳と科学の連関を考察する意図を読み取り、その意図は戸坂潤の認識論的関心と結びつくとする。
- (9) 平子友長「戸坂潤における実践的唯物論構想」（全国唯研大会分科会「一九三〇年代の日本思想―戦前の唯研から八〇年」（二〇一二年一月二二日）発表レジュメ「唯物論研究会」ホームページ <http://www.zenkokuyuiken.jp/contents/taikai/35taikai/tairako.pdf>（二〇一一年七月二九参照）は、戸坂潤が「道徳の観念」で、社会科学と異なる文学のモラルを基礎づけるために、社会の担い手である「個人」と、文学道徳の担い手である「自分」という対概念を導入したとする。文学のモラルは、社会科学によってイデオロギーとして把握される「個人」の道徳を、「自分」一身の道徳として身体化するものだという。
- (10) 本文は、『戸坂潤全集第四卷』（前出による）。林淑美「思想と風俗」所収文初出について」（『東洋文庫六九七 思想と風俗』平凡社、二〇〇一・一一）によれば、初出題名は「文学とモラルの説」で四回掲載（『都新聞』一九三六・七・一一〜一四）。
- (11) 本文は、『宮本百合子全集第十一卷』（新日本出版社、一九八〇・二）による。

- (12) 「今日の文学の展望」は、一九三六年の二・二六事件以降に現れた「ヒューマニズムの問題」を論じる際に「モラル」を自身の言葉として用いる。宮本百合子は、「芸術が必要とする科学」(『都新聞』一九三六・七・三〇六)などで「モラル」を用い、「文学における今日の日本的なるもの」(『文藝春秋』一九三七・三)などで、同時期の「モラル」の用例を示す。宮本百合子も、戸坂潤がいうモラルという語の流行の中にあると言える。
- (13) 本文は「能動精神パンフレット」(前出)による。ただし旧字は新字に改めた。本論の引用は、「今日の文学の展望」の引用のさらに一部を示したものだ。
- (14) 本文は、『戸坂潤全集第四卷』(前出)による。初出は「行動主義文学の批判―日本の行動主義文学に限定して―」(『新潮』一九三五・一)。白井吉見「行動主義論争」(『文学界』一九五五・六・七)『近代文学論争下』筑摩書房、一九七五・一)は、戸坂潤の批判は、「具体的であり、現在の事態に対する正確な洞察に基づいている」とする。
- (15) 本文は、『戸坂潤全集第四卷』(前出)による。初出は「モターニズム文学の批判」(『行動』一九三四・一〇)。
- (16) 本文は『行動主義文学論』(前出)による。ただし旧字は新字に改めた。
- (17) 本文は、『坂口安吾全集02』(筑摩書房、一九九九・四)による。
- (18) 柄谷行人「日本文化私観」論(『文藝』一九七五・五・七)『坂口安吾の世界』冬樹社、一九七六・四)の指摘による。
- (19) 「敗北の文学」の引用は、『日本プロレタリア文学評論集5宮本顕治集』(新日本出版社、一九九〇・九)による。
- (20) 原卓史「坂口安吾「文学のふるさと」論」(前出)の指摘による。
- (21) 中嶋潤「知らされる論客シャルペロー 新旧論争における童話作家」(三恵社、二〇一八・九)。
- (22) 本文は、新倉朗子訳『完訳ペロー童話集』(岩波書店、一九八二・七)による。
- (23) 『日本国語大事典』第二版(小学館、二〇〇〇)二〇〇二の用例による。
- (24) 『岩波哲学辞典』(岩波書店、一九二二)〔大正一一〕一〇)参照。